

谷崎潤一郎研究会

Tanizaki Junichiro Studies Weblogs

<< 『谷崎潤一郎のディスクール 近代読者への接近』 | [main](#) | 『谷崎潤一郎全集』第4巻 >>

『愛国的無関心 「見えない他者」と物語の暴力』



◆この息苦しい閉塞感に風穴を開けるために！
「韓国」「北朝鮮」「在日」などの記号に罵声を浴びせるヘイトスピーチ、ネット上での匿名による中傷など、最近の愛国的空気の中には、明らかに相手は誰でもいいという「他者への無関心」があります。本書は、このような風潮を近代日本の帝国主義に基づく無関心に起因しているとして「愛国的無関心」と名づけ、その構造を近現代のメディア言説、小説、映画などを題材に明らかにしていこうとします。そのさい、かつてファシズム期に行なわれた「伏字」（危ない文章を○や×で置き換えたもの）という日本

独特の検閲制度が重要な役割を果たし、我々の他者への不感性を作り上げてきたと言います。瀬戸内寂聴、徳田秋声から現代の「在日」小説までをとりあげて、斬新な視点から思想史に新風を吹き込みます。デビュー作『帝国と暗殺』の続編でもあります。【出版社の紹介文】

谷崎関連では、第4章「天皇制と暗殺」で「神と人との間」が取り上げられ、作中の伏字に注目しながら添田の死と明治天皇の死の重なりを読むことで、この作品を「禁止された性的表現のあることを伏字によって表面的に強調しながら、描写のレベルで天皇暗殺という未遂の物語を華やかに実行し、政治的な禁止を侵犯してみせるという不敵な小説」と評されている。また、第6章「帝国とファム・ファータル」で「痴人の愛」が取り上げられ、ナオミに付された「混血児」というレトリックに注目、オリエンタリズムの観点をふまえながら、ファム・ファータルとしてナオミを読むことの意味を問うことで物語に仕掛けられた「帝国主義とジェンダーの問題構制」が検討されている。

(内藤千珠子著、新曜社、2,700円+税)